

伝統と前衛。 美術商がみつめる『書』の継承。

かしま びじゅつ
加島美術 (東京都・京橋)

取材・構成 編集部
撮影 伊藤千晴

美術をもっと楽しもう

優れた美術品は美術館でみるもの。そんな先入観を持った人は少なくないだろう。しかし美術を楽しむ場所がひとつだけとは限らない。たとえば東京・京橋の加島美術は「ギャラリー」という立場から美術に新しい光を当て、多彩な作品を世界に発信している。

「美術館では企画に沿った作品が展示されます。異なるカテゴリーの作品をひとつの空間で自由にみる機会はそう多くないでしょう。しかし弊社のギャラリーでは、ジャンルを問わず古今東西の優れた美術品を鑑賞していただけます」と語るのは、同社の社長・加島林衛氏だ。加島氏は単に作品を販売するだけでなく、より多くの人に美術の新しい楽しみ方を伝えたいという。

美術の真の姿とは

東京駅や京橋駅からほど近く、現代的なオフィス街にたたずむ加島美術のレトロなビル。ここが日本の古美術を中心に扱うギャラリーだとすぐにわかる人は少ないかもしれない。店内へ足を踏み入れ



加島林衛社長。

ると、目の前にはコンクリート打ちっ放しのスタイリッシュな空間が広がっている。そこに伊藤若冲や池大雅らの江戸絵画を代表する作家から、横山大観や菱田春草ら近代絵画の大家、さらには井上有一ら現代書家の作品までもが展示されているのだ。

「掛軸や屏風は和室にしか似合わないと思われがちですが、そんなことはありません。優れた作品はマンションの洋室にも映えます」
そんな思いから、ギャラリーにはさまざまな空間を用意した。2階には本格的な茶室や板張りのエリアも設けられており、多彩なシチュエーションで作品を楽しむことができる。

さらに近年は古美術のみならず現代美術の取り扱いも展開。写真から抽象画、現代日本画まで、やはりジャンルに垣根はない。ドイツやフィリピンなどの海外作家の展覧会も積極的に開催している。一見、古美術と現代美術の世界には大きな隔たりがありそうだ。しかし古美術を扱う時も現代美術を取り上げる際も、その根底にあるものは変わらないと加島氏は言う。

「現代美術にも注力していますが、われわれは目新しさだけではセレクトしません。作家をみる時には、伝統を汲み取った上でいかに新しい作品を生み出しているか、ということを重視します」

たとえば先に挙げた井上有一もそのひとり。中国の顔真卿の書を臨模し、伝統を学ぶことからスタートした有一は古典的なスタイルを身体に染み込ませている。単なる思い付きで斬新な作品を描いてい



高い天井とコンクリートの壁が印象的なギャラリー内部。2013年4月に現在の場所に移転。